

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日
令和元年六月一日発
百特別秋水誌第六二七号
百二十二巻第六号

ホトトギス

六月号



風雅の小筥〔十七〕

廣太郎

「季題は俳句の命です」とはその昔、ある現代俳句の旗手とも言える人が某新聞の俳壇選者に就任するにあたって語った言葉で、この方の言としては少し不思議な心持ちがして未だに覚えているが、我々花鳥諷詠を信奉する者にとつては、正にこの言葉は至言とも言えるだろう。これに伴つてやはり歳時記は必需品であり、バイブルのように思つておられる方も多いのではないだろうか。バイブルといえば、現在でもこのような方がおられるかどうかは判らないが、地方の指導者的な立場の方で「句作の時は『虚子編新歳時記』しか使つては駄目」とおっしゃる方が実際おられたという事を聞いた。勿論虚子編の歳時記は永遠のベストセラーと言える程文学的価値の高い名著である。ただ、実作としては、現代という時代はやはり少し変わってきた事は否めないのではないだろうか。そんな便を考慮して、虚子編を踏襲する形で編纂されたのが昭和六十一年五月三十日発行の『汀子編ホトトギス新歳時記』なのである。当時の実作に適つた虚子編の改訂版とも言えるものであつた。その後平成八年二月一日発行の『ホトトギス新歳時記改訂版』は主に例句の入替に止まつたが、平成二十二年六月一日発行の『ホトトギス新歳時記第三版』では三十もの新季題が採用された。新季題を採用するにあつたこのプロセス等は来月のこのコーナーで申し上げたいと思うが、花鳥諷詠は、決して過去の単なる盲従ではなく、伝統を踏まえた新しさを常に追求するという理念ではないだろうか。

旬日記 汀子

平成三十年六月二日 芦屋ホトギス会

咲きそめし未央柳に頼む留守
夜の帳下りるを待てぬ蛩狩
稽古会済ませし安堵明易し
海そこに山近づけて夏の川

六月三日 下朗句会

老鶯に誘はれしごと山路行く
いつ咲きていつ萎えしかと女王花
蝸牛にも急ぎたき心あり

六月四日 ロイヤル俳壇

薫風や庭に出てみるだけのこと
又誰か転びしと聞く梅雨入りかな
薫風に誘はれゆく心あり
あつてなき心構へや梅雨に入る

六月八日 工業倶楽部

梅雨入りせしとは言ふばかりなる日和
鮎膳に向ふ川音聞く二階
用事増えたるを覚悟の梅雨入りかな
六月十二日 大阪倶楽部

東京の滞に於て梅雨に入る
体調に一喜一憂明易し
梅雨の旅とて心の荷携へて
明るさも暗さも梅雨のものとして
薫風を入れて朝のはじまりぬ

六月十二日 綿業倶楽部

杜若より歩を移す水辺かな
雨誘ふ如くに咲けり杜若
二三人集ひたるより風薫る
薫風や雨のち晴となる外出

六月十四日 清交社

わが庭に植ゑたくなりぬ花石榴
鮎の宿とて届きたる案内状
出水禍の記憶はいつも新しく
わが街の出水も過去のものとなる
雨多き日々に咲き継ぐ石榴かな
川音の二階へ届く鮎の膳

六月十六日 北近畿ホトギス俳句大会前日句会

五月晴明智最扇の城下町
城下町は坂多く緑濃し
梅雨晴の青空仕上げ行くために
六月十七日 北近畿ホトギス俳句大会

邂逅の尽きぬ語らひ朝涼に
六月十九日 有恒俳句会

火取虫部屋のどこかが開いてをり
地震ありしことと梅雨の一日かな
皆無事を確かめしより会の夏
幹事まだ着かぬ鮎鮎あり地震の夏
入梅と聞きて雨なき二三日
露涼し地震二日目となる集ひ

六月十九日 無名会

留守多き主と知らせて草茂る
旅共にせしを語らん涼しさよ
一枚となるまで庭の草を引く
地震の夏過去の記憶の甦る
蝸牛逃げ足はやくこと確か
草が所在いづから知りぬ蝸牛

六月二十日 夏潮句会

父の日の花束として預かりぬ
地震ありぬ加へて梅雨の降りつる
黒南風や旅心なほ失せぬ日々

今宵咲く月下美人と思ひけり
ジャカランダ咲きて明るき梅雨一と日
黒南風や加へて地震のありし日に
六月二十二日 アネモネ句会

人悼み人を偲びぬ青嵐
雨の夏至気づかず過ぎてをりにけり
青嵐かへて雨の一日かな
蜘蛛の網払へば庭へ涼しき灯

夕食のあとの紅茶に涼しき灯
六月二十五日 きさらぎ会

三瓶への旅の近づく夏野かな
子等減りて夏野広々あるばかり
亡き友と歩きし夏野偲ぶ日に
悲しきは心に秘めて夏野歩す
蝸牛よみゆつくりと消ゆるもの
六月二十八日 句会と講演の会

わが留守を守宮に托し旅にあり
風絶えてそこに網戸のあるばかり
勝手口出入り自由の網戸かな
六月二十九日 時雨句会

見かけなくなりしは蠅もその一つ
夏帽子いつもの彼女とは違ふ
万緑を抜けて万緑つゞら折り
年取りしことを忘れて夏帽子
バスポート切れて残りし夏帽子
夏至過ぎて何か淋しき心かな

六月三十日 芦屋ホトギス会

筒抜けの声か網戸に加はりぬ
口にして今日の暑さの中に居り
虹消えて消えざるものの中に立つ
咲き終りたるも女王花の矜持

廣太郎句帳

廣太郎

平成三十年六月十日 若屋ホトギス会

日本人 枢機卿 生れ 明易し
夙川の 闇を 束ねて 蛩舞ふ
夏の 川星 野仙一 郎 見上げ

六月三日 野分盆屋例会

司教座に 慶事 天竺 葵かか
喜びの 流れて 来たる 夏の川
ローニウムへの 道開かれて 夏の川
ゼラニウム 咲かせ 司教は 句友かな

六月三日 青嵐会 盆屋例会

青空に 手を 突つ 込めば さくらんぼう
さくらんぼう 食みて 司教に なられしと
網戸より 洩れくる 五番五楽章

六月四日 カトリック新聞 選者吟

枢機卿 司教 俳人 五月 晴

六月七日 蕉心会

川風に 青蔦の 色 育ち ゆぐ
橋桁を 吊り 上げて みる 五月 晴
川面 舐め 折れ 曲り たる 南風 かな
橋 潜る より 遊船の 音と なる
黒南風 の 色を 奪う て げく 日 差
五月 晴 明日は 西へ と 繋ぐ たく
鷗 飛ぶ 黒南風 白く 塗り 替へ て
額の花 一本に 統べ られ し 庭
風に 耐へ 咲き 残り たる 沙羅 一花
六月八日 六甲会

五月 闇 黄を 主張 せし 館の 花
五月 闇 拓ひ 句友に 慶事 かな

大都市の 視界 奪ひ 五月 闇
大琵琶を 小さく 凹ませ あめんぼう
恋の数 ほど 五月 闇 濃かり けり
六月十日 (公社) 日本伝統俳句協会 通常総会

梅雨 寒を 払ふ 俳句の 未来 かな
六月十一日 朝日カルチャー 若草句会

亀の子に 母なる 池と なり ゆける
万緑を 越え 万緑を 越え 西へ
六月の 雨夕暮を 引き 寄せて
名園の 朝 六月の 色に 明け

六月十四日 土筆会

水底に 消ゆ 亀の子の 刹那 かな
回り つつ 地球 青から 万緑へ
梅雨 咲いて みよし 野時を 重ね ゆく
著我 咲いて みよし 野時を 重ね ゆく

六月十五日 北國文芸選者吟

さくらんぼう 君の 唇染め 上げて
路地奥に 佃煮 匂ふ 椰雨 晴間
夕闇を 拒む 吉野の 著我 豊

六月十六日 北近畿ホトギス大会

梅雨 晴を 突き 刺して みる 天守 閣
大江 山あ の 山と 思へば 涼し
露 涼し 墓石を 城の 石垣に
涼しさは 丹波の 一会あり てこそ
千年の 靈気 放ち たる 汗 涼し

六月二十一日 登高会

蟹 怒る 鉄の 角度 六十度
この 下 に 活断層 や 草を 引く
砂の色 して 磯蟹の 消え ゆけり
人の 手が 神の 御業の 草を 引く
菖蒲池 年尾 立ちし は この 辺り

六月二十一日 登高会

紫に 明け ゆく 園の 菖蒲池
六月二十一日 「河内野」 関東大会
新主宰 囲みし 緑 灯 涼し
六月二十四日 青嵐会 東京例会
梅雨空を 掻き 混ぜて みる 鳥語 かな
公園に 咲く もの 嬉々 と 梅雨 かな
梅雨傘を 買う て 句心 整へる
一と 雫より 青梅の 育ち ゆく
鷗尾の 先より 白南風 の 生れ ゆく
六月二十四日 野分盆屋例会

夏の 川渡れば 大気 入れ 替る
ゼラニウム いよよ 狭庭と なり ゆけり
ゼラニウム 色に 迷ひ の なかり けり
六月二十六日 若水句会

まひまひに 水の 躍つて をり に けり
百歳を 目指し 茅の 輪を 潜る 母
菓の 香に 未来を 秘めて 茅の 輪 かな
六月二十七日 目黒学園句会

魂を 置き 去りに して 茅の 輪 かな
黒南風 に 戦く 電波 塔 二つ
青鷺に 時といふ もの 無かり けり
青鷺の 足が 地球を 回し をり
青鷺の 己を 人と 思ふ 所作
黒南風 に 染まり 切つ たる 都心 かな
本社より 末社 大きく 茅の 輪 かな
六月二十八日 ホトギス社句会

新築の 壁に 守宮の 主顔
玻璃 越しの 守宮の 腹の 息遣ひ
白亜紀の 記憶 守宮の 足裏 かな
六月三十日 若屋ホトギス会

番線が 変り 新大阪 暑し
朝虹に 富士 全容を 明さ ざる
月見草 星の 化身と して 三瓶

雑詠 廣太郎 選

現世より天国の道去年今年 東京 河野昭彦
 元日や一人足りずに献杯す 同
 亡き妻のレシピを継ぎし雑煮かな 同
 もう一度庭歩きたし春を待つ 長岡 安原 葉
 あれほどに回復の春待ちぬしに 同
 春待てず何に急かされ逝かれしや 同
 寒林や躑し背に突放さるる 香川 湯川 雅
 手袋を落し切符を落し急ぐ 同
 紅梅や空はついでに見てをりぬ 同
 寒紅にふつと殺気のやうなもの 熊本 岩岡中正
 額より冬あたたかくなりけり 同
 ふところに嬰抱くやうな冬日向 同
 去年の闇抜けて今年の富士となる 袋井 湖東紀子
 元日の夕日となりて沈みゆく 同
 少しづつ変はる日常日脚伸ぶ 同
 過ぎし日々さらりと捨てて初暦 龍ヶ崎 今橋眞理子
 幼子の御慶囲みて一家あり 同
 二三羽に遅れ一二羽初御空 同

病床の枕に敷きて宝舟 神戸 千原叡子
 健康が私の取り得小豆粥 同
 人に謝し運命に謝して春を待つ 同
 初雪にしてこんな大牡丹雪 同 後藤比奈夫
 めづらしや六甲吹雪摩耶吹雪 同
 冬ぬくし父が居母がゐる如く 同
 毀れたる体内時計風邪の所為 相模原 木村享史
 仕方なし白旗掲げ風邪に臥す 同
 風邪の神去らずよ老をあなどつて 同
 笹鳴や山の産声聴くごとく 神戸 涌羅由美
 しろがねの潮の鋒なるさより 同
 凍雲に海は藍いろ失ひし 同
 厳寒の底一灯をもて学ぶ 同 山田佳乃
 阪神忌六千余てふ星の声 同
 寒牡丹快癒の窓を寿ぎぬ 同
 夜明けより先に鱈の光りけり 同 立村霜衣
 海よりも海の色して鱈(へ)の眼 同
 木の実植ふること胸の灯しとす 同
 人々や国の寒さの駅に立ち 東京 田丸千種
 冬帽子居眠るやうに覚めてをり 同
 パブ今もジュークボックス寒の月 同
 元号を予想し合うて寒雀 神戸 和田華凜
 鴨帰る余呉湖に影を残しつつ 同
 雛あられもて余すほど甘からず 同

雑詠句評（五月号より）

海原を大地としたる鯨かな 袋井 湖東紀子

地球上で生息する中では最大級の大きさを誇る哺乳類であるところの鯨は、海が生息地である事は周知の通りである。印象としては魚類をイメージするが、そんな不思議な生態もこの句には反映されているのではないだろうか。大きな鯨が大海原を大地としてダイナミックに生活しているのである。（廣太郎）

句の神の旅立ち筆紙ふところに 相模原 木村享史

様々な神が出雲に集まるといふ神の旅、田の神から疫病神、貧乏神まで歳時記に載っているが、俳句の神様とは。しかも、ふところには俳句手帳と筆記用具を持っている、ということとは、道中吟行して句作しつつ出雲へ向かうのだ。つまり神社で柏手を打ち、佳い俳句が授かります様に、などと祈っている暇があったら寸暇を惜しんで吟行せよ、という作者のメッセージとも思えてくる。

（肖子）

年に一度出雲に神々が集う神無月である。八百万の神の中には当然俳句の神様も居られてもおかしくはない。結構この旅を吟行と洒落込んで句作をしながら出雲までの旅を楽しんでおられるのだらう。やはり句を認める為の紙と筆は神様でも必需品である。何とも愉快な句である。（廣太郎）

四海波耳馴れたるを謡初 神戸 後藤比奈夫

いかにも穏やかでめでたいお正月。家族打ち揃つての平和な謡初の風景である。謡曲「高砂」の一節「四海波静かにて……」そのもの。謡初は慣例の家庭行事だが、やはりこの「耳馴れた」「四海波」が一番だと、しみじみ諾っている作者。

この句のポイントは「耳馴れたるを」で、ここに、とくに新味はなくとも、耳馴れた曲を謡い昨年同様無事に過ごすことが何よりの幸福だという哲学が述べられている。

作者は三年前、九十九歳で句集「白寿」を上梓され、日本現代詩歌文学館賞が贈られた。「さまざまな苦難にも動じない軽やかな主体」の「飽くなき好奇心とユーモアの精神」と私は評したが、それは掲句の今日も変わらない。この句は、いかにもこの作者にふさわしく大らかでゆるぎない。円熟とゆとの一句。（中正）

天地有情

俱に病み語りて春を待ちぬしに
 春を待ちぬたる遺影の語る声
 赤まんま第三幕のプロローグ
 赤まんま地震の記憶を色に秘め
 宰相の心は奈辺 懐手
 懐はなけれど心 懐手
 師走病むとはもどかしきことならむ
 春待たずして全快と聞く安堵
 師の見舞 恭うし松の内
 病み抜けし夢より目覚め春を待つ
 金真砂撒きたるごとき蚩かな
 佐比売野の大月夜なる月見草
 筆づかひやさし呉春の絵双六
 半襟は白梅の柄春近し
 東京をかすめ一瞬 風花す
 町の名も梅ヶ丘とて梅早し
 ささやかな願ぎ事ばかり初詣
 福引やくじ運のなき父と子と

長岡 安原 葉
 東京 稲畑廣太郎
 神戸 後藤比奈夫
 相模原 木村享史
 神戸 千原叡子
 福山 竹下陶子
 神戸 和田華凛
 東京 今井千鶴子
 同 山田閨子

山住の家路探梅ごころかな
 探梅の風の間合を潜りゆく
 寒雷のやうな一句を欲しけり
 会釈して焚火にあたらせてもらふ
 命得し如くに独楽の回り出す
 待春の空いつばいに枝ひろげ
 本復を実感しつつ春を待つ
 避寒宿御用邸へも遠からず
 鳥のこゑからりと空へ夏来る
 ごきげんな風に干さるゝアロハシャツ
 足下は真青なる海野水仙
 声聞けば会ひたくなりし初電話
 探梅に立食ひ蕎麦といふ馳走
 靖国に福引をひき卒業なる
 遠景の明石大橋 秋晴れて
 大手門の歓迎の意か綿虫飛ぶ
 牧水のい行きいゆきし山眠る
 山眠るその夢を見に来しわれぞ

宝塚 水田むつみ
 熊本 岩岡中正
 龍ヶ崎 今橋真理子
 神戸 三村純也
 東京 今井肖子
 袋井 湖東紀子
 東京 大久保白村
 吹田 大橋 暁
 群馬 中杉隆世

金子選